（1）2023年3月13日（月）1面　掲載

柏崎日報社転載許可済

◆産大レクチャー　ア・ラ・カルト〈185〉

柏崎に「島留学」　佐々木　洋輔　助教

産大レクチャー ア・ラ・カルト〈185〉

柏崎に「島留学」

佐々木 洋輔

「島留学」という教育プロジェクトが昨今注目されている。島留学プロジェクトは島根県の隠岐の島という離島で起こった。隠岐の島では、受験を機に島外の学校に進学する子供が多い状況にあった。この課題解決には、①島在住の若者の流出対策と、②島外の受験生を島の学校に呼び込むこと（マーケットの拡大）の2点が必要であった。

当プロジェクトでは、島でしか体験できない生活や学びを全国的にPRし、島外の受験生を島の学校に呼び込むことに成功した。島外からの受験生の増加は、学校や地域を活性化し、島在住の若者の流出の減少につながる好循環を生んだ。この成功に注目した島根県では、隠岐の島に限らず、島根県全体で当プロジェクト（地域みらい留学〈しまね留学〉という名称）を進めることとし、①島根在住の若者の流出対策と、②島根県外の受験生の島根の学校への呼び込み（マーケットの拡大）を行った。

島根県立江津高等学校では、県の強化指定運動部である水球部と、地域の伝統舞踊「石見神楽」に着目した。前者の同校水球部は全国大会で準優勝した実績があった。一方で、この20年間で学校の生徒数が半減し、水球部は約10年間、部員はいるものの、人数不足で公式戦出場がかなわぬ状態で活動していた。「しまね留学」プロジェクトにより、関東圏や関西圏へのマーケットの拡大と地元在住のジュニア水球選手の流出減少に成功した。後者の石見神楽においても、同様に、関東圏や関西圏へのマーケットの拡大と、地元出身者の流出減少という成果が上がっている。また、「留学生」は、10月（島根県は神在月）に県内の各神社で夜通し行われる奉納神楽に参加するなど、島根県ならではの行事や文化に触れる経験を積んでいる。このようなオリジナルな経験や暮らしは、生徒と保護者から好評を得ているようである。

昨今、地方の人口流出対策として、都会から地方へのUターン・Iターンを促進するプロジェクトが地方の行政で進んでいる。しまね留学プロジェクトは、地方の学校教育の魅力により、結果的に都会から地方へのUターン・Iターンを促進している。柏崎市は隠岐の島のような「島」ではないが、柏崎市においても、壮麗な米山や日本海、夕日、花火大会、高柳地区の美しい景観、美味（おい）しいお米に日本酒や鯛茶漬け、伝統的な綾子舞などがあり、非常に魅力的な地域であると私は思う。島根県隠岐の島の「島留学」の発想で、教育分野から地域活性に寄与していきたい。

（助教）

＝毎月1回掲載＝

（2）2023年3月14日（火）2面　掲載

柏崎日報社転載許可済

◆地域に学び地域をおこすー実践活動レポートー

料理を通じ国際交流

【新潟産業大学】

地域に学び地域をおこす

――実践活動レポート――

料理を通じ国際交流

柏崎地域国際化協会主催の多文化理解講座「ネパールスパイスカレー」が先日、市民プラザで行われた。同講座は市内在住のネパール出身者が講師となり、参加者と一緒にネパールの家庭料理を作りながら交流をする、というものだ。

当日講師を務めたのは本学の留学生ガレラリタさん（3年）。同協会の言語文化サポーターとして活動している彼女は、以前から料理を通しての国際交流に関心があり、今回の講座を企画した。

料理の内容はネパールのグルン族に伝わる「チキンカレー」と「アチャール（付け合わせ）」。日本の家庭でも手に入りやすい食材を使い、気軽に作ることができるレシピで、お米に合う味付けだ。

参加者は料理を作りながらガレラリタさんにカレーのスパイスや調理のコツを確認する一方、日本での留学生活のことや両国の文化の違いを質問するなど、終始和やかな雰囲気で進められた。

ガレラリタさんは「講師を務めるのは初めての経験で緊張しましたが、参加者の皆さんがフレンドリーだったのでスムーズに進めることができました。講座を終えたあとに今回のレシピを自宅でも作って楽しみたい、ネパールについてもっと学びたい、と言ってくれたことが何よりうれしかったです」と話していた。

同協会の職員・小林よしえさんは「参加者と積極的にコミュニケーションを取り、講師を通してネパール文化を知る機会となった。市内で働く、ほかのネパール出身者と市民との間でも、これを機に交流が増えるとよいと思う」と今回の講座を振り返った。

本学には10カ国の国と地域から留学生が学びに来ている。今後も留学生がそれぞれの文化を地域に伝え、母国と柏崎をつなぐ架け橋になることができれば幸いだ。

（同大学地域連携センター）

（3）2023年3月18日（土）2面　掲載

柏崎日報社転載許可済

◆「激変の社会　自信持ち前進」産大卒業式　121人が新たな船出

「激変の社会 自信持ち前進」

産大卒業式 121人が新たな船出

121人が新たな道へと旅立った新潟産大の卒業式＝18日、同大講堂

新潟産大（梅比良眞史学長）の第32回卒業式・学位授与式が18日、同大講堂で開かれた。学部卒業生111人、大学院修了生4人が新しい人生に期待を膨らませ、学びやを巣立った。

学位記の授与式では新型コロナウイルス感染予防を一部継続し、講堂内ではマスク着用、来賓は桜井市長ら3人のみ。経済経営学科、文化経済学科、院生の代表3人が受け取った。

梅比良学長は式辞で「社会はますます変化の速度をあげ、日々情報と知識を更新しなければならない。自分の立つ位置をしっかり理解し、自信をもって前進してほしい」とし、フランスの哲学者ブレーズ・パスカルの言葉「人間は一本の葦（あし）にすぎない。自然の中で最も弱いものである。しかし考える葦である」を贈った。

在学生代表の3年・吉川一生さんは「私たち在校生は先輩方の思いを引き継ぎ、新潟産大がさらに発展するよう尽力していく。大学での学びや友人との日々を力に、活躍することを願う」と送り出した。

卒業生代表の村川日向子さんは「大学生活に慣れた2年目、春はリモート講義で孤独も感じた。対面で友人に会えたときの喜びはひとしおだった」と振り返り、「多くの縁と支えがあった大学生活。そこには私を育て、見守り、いつも味方でいてくれた家族がいた。社会人として自覚と責任、志を持って生きていきたい」と感謝し、決意を表した。

卒業生の就職内定率は97・6％で前年の98・3％を0・7ポイント下回った。学長賞、功労賞は次の通り。

学長賞＝五十嵐壮大、吉越耀▽功労賞＝稲場悠介、野田一成、小浦英莉子＝以上スポーツ＝、杉田有紀奈、本間陸斗、吉越耀、大橋ましろ、樋口萌香＝以上地域連携＝

柏崎日報社転載許可済

◆地域に学び地域をおこす－実践活動レポート－

耕作放棄地の森林化へ挑戦

【新潟産業大学】

地域に学び地域をおこす

―実践活動レポート―

耕作放棄地の森林化へ挑戦

金ゼミナール（観光ビジネス／アグリ・フードビジネス分野）では、柏崎市の堀地区で耕作放棄地を活用した野菜栽培を続ける。その一方、耕作放棄地に対する取り組みの場所のひとつとして高柳町を選び、同町内の実態を調査し、植林など活用方法を模索している。

柏崎市の中山間地域である高柳町は人口減少、高齢化により耕作放棄地が急速に増加し、全耕作地の3分の1以上が放棄され、今後も増えることが予想される。これらの耕作放棄地はこれ以上耕作地として活用することはもはや不可能であり、そのまま放棄しただけでは自然に戻る状態でもない。そこでこれらの放棄地の環境に適する植林を進めることで森林化を図り、たら、くるみ、栗などの木を植樹することで将来の経済効果も図る事業を展開する計画だ。

昨年6月に高柳町の耕作放棄地の実態を調査し、高柳町の岡田地区の約20㌃の耕作放棄地を借り、そこに植林することから着手した。10月下旬にゼミ生が中心となり、その耕作放棄地に植林を開始。10年以上放棄され、草が密生している耕作放棄地の周辺から草を刈り、その土地の環境に適する木（くるみ・どんぐり・くぬぎ・萩など）の種を蒔いている。

金ゼミナールの学生たちは、毎年春と秋に定期的に高柳町の耕作放棄地で多様な種類の樹木を周辺の自然環境に合わせて植えている。同ゼミに所属する忠育翔さん（3年）は「自然と共存する持続可能な森の再生に関与することができてうれしい」と話している。

この事業は1～2年で終わるものではなく、長期的な事業として展開することで、耕作放棄地を豊かな森に再生するという目標を達成していきたい。

（同大学地域連携センター委員・金光林教授）